

日観と墨葡萄

島田 修二郎

墨葡萄という墨画の特殊な一類が、はたして何時から起ったか、確実にはわからないが、最も早い墨葡萄の画家の一人として、またその最も優れたものとして広く知られているのは日観である。日観とはほぼ同時代に、作品は伝わらず伝記も全く知られていないけれども、相前後して画僧の演というものの、同じく因というもの、また葉洞春、蕭萬邦らが葡萄を画いたことがわかるから、墨葡萄の創始を簡単に日観の功に帰してしまふことはできない⁽¹⁾。中国の史家も墨梅における仲仁のような創始者たる地位を日観に認めてはいない。明の長谷真逸の農田余話のように、日観が墨葡萄を創めたとする説が全

くないではないが、一般に受けいれられてはいない⁽²⁾。大体、蔬果の類の墨画には北宋の中頃から始まった歴史があるので、その中の一種に入るべき墨葡萄も、その発展の中で自然に開けてゆくべき形勢にあった一小分野にすぎぬとも言える。しかし、葡萄というのは本来、西方の異国の産物であって、始めて中国に伝来してから日観の時代までにはすでにほぼ千年を経たとはいえ、多くの詩人の題詠を通してみると、なお異国情緒を漂わすものとしてみられていた。それをば純中国的な墨画、それも文人画的な墨戯の専芸として画くようになったのは、何としても墨画の歴史の上では注目べき発展と言うてよい。このささやかながらも新しい墨画の分野に対して、一般の人の眼を

見開かせ、元、明両朝を通じて墨葡萄が盛に画かれるに至る気運をおこす上に、日観の力が非常に大きく働いていたことは確かであって、その意味で、日観は中国絵画史に特殊な地位を占めることを認めねばなるまい。

日観は江蘇省の華亭の人。松江府志にその小伝を載せている。僧としての名は子温、字は仲言、日観はその別号であるがこの号でもって一般に知られている。早くから僧となつたらしい。元詩紀事には宋が亡んでから出家したと言うが、これは牧溪が宋朝の滅亡後に入道したとするのと同様の誤である。後に述べるように、権力をほしいままにして宋帝の陵墓を暴いた元朝の釈門總統の楊璉真伽を憚る所なく罵倒したなどの行為から、宋の遺老と呼ばれる人たちと同様にみられたのであろう。図繪宝鑑は日観をば南宋の画人を集めた巻四に収めているが、日観の生存年代を誤つたのか、または宋の遺老として取り扱つたのか明かでない。何れにせよ、日観は宋朝に節を立てるために、またはその滅亡を機縁として出家したのではない。全くの宋人である張堯同、周弼らがすでに彼を僧と呼んでいるから、このことについては疑をいれる余地はない⁽³⁾。日観という外に玉山、知帰子などの号がある。一山一寧が虎関に指教した如く、日観、知帰子の号、また彼の印章の句の芬陀利華という語は、

明かに彼が浄土教に心を傾けていたことを示している。⁽⁴⁾ また元の柳貫が彼の墨葡萄に題した詩の一句に「酣嬉坐証法華門」とあるので、始は天台の学を修めたとも察せられる。⁽⁵⁾ 恕中無愠が日観は早く教庠に遊び、後に禅肆に入ると述べているのは、そのような事情を指して言うのであろう。⁽⁶⁾ 宋代では中国の浄土教は禅宗と並んで実践仏教の二大主流の一つであったが、独立した一宗とはならず天台宗の寓宗の形で存在しており、他方また宋末からは禅淨融合の動きがあつて禅宗にも浸透していた。そうした還境にあつてみれば、日観が天台を学んだ浄土業の行者であると同時に、他方で禅寺に寄寓し禅僧と接触していても不思議ではない。交遊のある人から依頼されると、得意の筆を揮つて般若心経や大慧宗杲の法語、宏智正覺禅師の語を書いたりしたのもその現れであらう。⁽⁷⁾ もっとも日観の草書は彼の葡萄画に劣らず、高く賞美されたことは隠れもないことである。しかし、ただ書法のために筆蹟を望む人のためには容易に筆をとるような性格ではなかったことも明かである。

日観は一箇寺に定住しないで、心境の動くに従つて方々の寺々を流浪して歩いたように思われる。といっても広く天下にわたつて諸方の名山名寺を遍歴するのではない。彼の住所としてわかるのは大体、郷里の華亭の寂照庵から、杭州西湖の周辺の諸寺に限られる。それらの寺院を転々と移り住んでいたらしい。それも一寺の住持の地位についたのではなく、放浪の僧が身を寄せたというに近い様子にみえる。彼に対して多かれ少かれ親近した人々が、彼に会つた場所として挙げている寺が夫々違うのでそう考えられる。早い時代、すなわち宋代ではまず、張堯同が日観を嘉禾の寂照庵の僧と呼んでいる。⁽⁸⁾ 元になると、鄭元祐が銭塘の温日観と呼ぶのを始め、幾人かが杭州または西湖の僧と言う。普通には杭州西湖の畔の瑪瑙寺にいたとされている。夏文彦の図絵宝鑑、陶宗儀の輟耕録、松江府志の方外伝など皆同じである。至元二

十九年三十年の頃に、日観が西湖の辺に止住していたことは、第一次史料である平石如砥の日観画跋に述べられている所によって疑ない。⁽⁹⁾ 何年とはわからぬが日観の晩年に彼を識つた袁桷は、彼と靈隱寺で会つたと言ふ。⁽¹⁰⁾ 至元二十七年に曾遇という人が日観と偶然に知り合つたのも同じ寺であつた。曾遇が日観から贈られた葡萄画卷に、日観の死後、皇慶元年に跋を書いた月江正印は、曾遇が日観に出会つた当時、自分は靈隱寺にいたのに日観に会う機会を得なかつたことを残念としている。⁽¹¹⁾ これらによつて晩年の一時期、日観が靈隱寺に寓居していたことは確かである。明末の李日華は日観が南屏山に隠居したとする。⁽¹²⁾ 南屏山というのは浄慈寺を指すのであろうが、これには傍証とすべきものがない。ともあれ上の諸寺は夫々に日観の一時の住所であつたのであろう。しかし晩年には靈隱寺にいたことが多かつたのではなからうか。曾遇が記す所が確実ならば、日観はそこに居住する房をもち、方丈から酒果をとり寄せられるほどに住持の虎巖淨伏を知つていたことになる。⁽¹³⁾ このように晩年の日観については、禅寺に寄寓し禅僧と交渉をもつことが多く伝えられているが、一方、彼の葡萄画の自題詩を見ると、老年にも浄土への想を棄ててはおらず、生涯、禅淨双修の道を歩んだと見える。日観の西湖周辺での放浪生活を、戴表元は五十年に及ぶと言つてゐる。⁽¹³⁾ これは勿論、概数を挙げたにすぎまいが、仮に至元三十年から溯つて三十年を数えると宋の淳祐五年になる。その前に嘉禾での生活を考えると、五十年と言うのは少し長きに失すると思われる。日観はかなり長命だったと想像されるが年齢を知る手がかりはない。また彼の老態について特に述べた人もないから、甚しい長寿とは思われない。最期は西湖の教寺で歿したと恕中は記している。⁽¹³⁾ その教寺と言うのが瑪瑙寺であつたかも知れない。

挿図2 同 部分

挿図1 日観筆 葡萄図

個々の具体的な行蹟については別として、日観の人品風格を比較的よく伝えるのは元の僧、恕中無慍、また一山一寧である。恕中の記述は殆ど引用されることがないから、今ここにその全文を挙げることにする。

温日観者。不惻人也。號知帰子。早遊教庠。尋入禪肆。縦性樂道。不拘小節。獨心係安養國。雖造次顛沛。未始暫忘。喜臨晋帖。寫葡萄。二者並臻其妙。凡到諸刹。臨別必索之錢。隨所得。詣屠沽家。沽酒獨酌。餘錢散與街坊小兒。令為前導。齊聲喝云。相公來。是故見之。輒追逐成群隊。作為詩偈。度越前古。

後終于西湖教寺。或謂託生白湛淵家。蓋世緣未了而了之耶。恕中無慍 山庵雜錄

卷上

恕中無慍はまず日観を惻り知れぬ人とし、始めに教寺へ後に禪寺に入ったと述べた後、日観の風格について小節に拘らず性に縦^{まか}せて道を楽しむものとする。これは言葉は異なるが一山一寧が真率で拘検すること無く、政黄牛の類であると言ひ、鄭元祐が法中の散聖と呼ぶのと同じ見方で、日観の禪者らしい一面である。続いて恕中は彼が阿弥陀浄土に心を傾けて少しも忘れることがないと禅浄双修のことを述べ、書画の二芸に卓越すると讃へた後、日観の狂逸な行蹟に移る。次々と諸寺を訪ね歩いた日観は寺を去る時は錢を求め、得た錢で酒屋へ行って独酌で酒を楽しんだ上、錢が余れば町辻の小兒らに与えて先触れの供とし、声を揃えて大臣さまのお出ましと叫ばせた。それで小兒らは日観をみると集まってきたと言ふ。そうした狂逸ぶりをみせはするが、書画の外に詩偈を作るのが巧みで、古人の詩偈の妙で知られた人たちに優るとも劣らなかつた。詩書画三絶と言つてよい人である。最期は西湖辺の教寺で歿したと言ふが、それが瑠瑠寺であつたかも知れない。最後に日観が歿後に生を替えて白湛淵の家に生まれたと言ふ話は外では聞かないことである。白湛淵は元代の詩人として聞えた白斑のことで、日観の画に詩を題した因縁

もあるが、如何なる事情があつてかかる伝説ができたのかはわからない。

一山一寧が日本に渡つてきたのは日観歿後から僅か五、六年と思われる大徳三年のことである。一山は少くとも最晩年の日観については直接間接の見聞を多くもつていたに違ひない。彼が当時は青年学徒であつた虎関師鍊に与へた教訓の中に、日観について物語つた一条があり、その内容は山庵雜録と互に参照すべきものである。これもここに原文を挙げておく。

温玉山畫葡萄。乃遊戲三昧耳。其為人甚眞率。無拘檢。如政黄牛之類。筆畫詞句俱高美。字有晋宋間諸賢筆法遺意。語句唐時高僧之體。乃一代偉人也。今已死矣。我國名士皆愛重之。又玉山平生修行。居十六堂中^(六の下の觀字脱落か)。十六觀

中有日観。修浄土業。故以日観自題。其名爲温。號爲玉山。有印文曰芬

陀利華。又有一印子。曰知帰子。皆浄土之意也。^(下略)海藏紀年錄 徳治元年條

まず最初に日観の葡萄画のことを言うのは、それによつて日観が最も広く知られていたからであらう。それは彼の遊戲三昧の事と述べてすましたのは、葡萄画が特にもてはやされることが意に満たなかつたのかと思われる。日観の書と詩についてはより多くの語を費して高く評価している。一方、彼の人と為りに関しては、散聖の一人である政黄牛に類するとするが、彼の狂逸の一面については、節度に拘泥しないと言ふに止まつて奇逸な行為の具体的な様相には触れず、言葉短かに一代の偉人と稱揚する。平石如砥が同輩を眼中におかぬと言つたのを想起させる語である。日観の浄土業について語つた後、彼の用いた印の印文にまで及んだのは、虎関を始め日本の禅僧の大部分が日観のことを全く知らなかつたからであらうが、或は一山が日観の書画の筆蹟を将来してきたのかも知れない。

文人たちが書き伝えたものは、等しく日観の狂逸な行蹟について語るにも

自ら異った面を伝える。鄭元祐は、日観と鮮于樞との交遊を中心として日観の逸事を遂昌山人雜錄に記す外に、ほぼ同様の事実を詩にも詠んでいる。ここでは雜錄の文を挙げることにする。

宋僧溫日観。居葛嶺瑤璫寺。人俱知其畫葡萄。不知其善書也。今世傳葡萄多贗。

其真者。鬚梗皆草書法也。酷嗜酒。楊總統以名酒啗之。終不一濡唇。見輒罵曰

掘墳賊。惟鮮于伯機父愛之。溫時至其家。抱軒前支離叟。或歌或哭。每素溫浴。

鮮于公必躬進澡豆。其法中所謂散聖者。其人也。支離叟。即伯機家所種松也。

鄭元祐 遂昌山雜錄

楊總統とは江南の釈門總統となつた楊璉真伽である。彼は兵火で焼亡した諸寺を復興する任に當つたが、宋の諸帝の陵墓を暴く暴挙を行つたので日観はそれを責めて墓堀りの大盗人と罵つたのである。このことは有名な話で、早く周密の癸辛雜識統集に記され、後に陶宗儀も輟耕錄に載せている。鮮于樞の日観に対する敬愛はただならぬものがある。日観が湯に入りたいと望めば、自ら糠または洗粉の類を進ずる。鄭元祐の詩では一層明瞭に垢を流したと記している。⁽¹⁴⁾ よほど深くその人を尊敬し親愛してなければできぬことである。鮮于家の庭に植えた支離叟と言う名の松に抱きついて歌つたり泣いたりしたことは、また日観の別な一面を表すようだが、鄭元祐はそれを明かにしない。このような狂逸な言動は、子供たちに温相公と噪し立てさせるのと同様、人々の目を引き易く、とかく話題に上り易い。布袋和尚のように寸足らずの衣をきて走り廻るとか、温相公と呼ばわって歩くとか、怒中の記す所と近いことは外にもこれを記した人がある。⁽¹⁵⁾ このような狂逸の一面とは反対の側面を戴表元は「面目嚴冷」と言う。李日華が「高潔自恣」と言うのも、日観の異つた両面を指して言うのである。文人が見た日観の他の面を戴表元の跋文を通じて見てみよう。

溫上人。面目嚴冷。欲求一笑。不可得。亦不肯輕諂人。而遇其性所喜悅。驪然自留。得錢出戶。即散施貧者。或多。則袖携以訪失職賢士大夫而與之。布袍葛屨。放浪歡傲於西湖三竺間五十年。吾觀其人。視策名貨利。為何等物。故其翰墨流落人間。足堪把玩。又善以意寫葡萄遊戲。遇物立成。至有氣力者。具紙素邀之。輒又一筆不與。聞東昌徐仲彬公。時々過其家。傾懷盡興。淋漓揮灑。皆不求而作。此卷心經。乃其行書。尤為難得。徐氏幸寶藏之。戴表元。剡源集卷十八 題溫上人心經

ここでは日観は錢を得ては小兒に与へて遊ぶ狂僧ではなく、貧者に頒ち与える慈悲の人であり、錢が多くある時は、職を失つた士夫にまで贈ることさえあつたと言う。元代には職につけない漢人士夫が多かつたから、日観の慈悲行はその人たちに幾許かの助となつただろう。嚴冷な彼は権勢あるものが紙絹筆墨の類を用意して招いても、一筆の書画も与えず、他方、自己の性情に合う人に遇えば喜んで語り合い、かの曾遇本の例の如く、求められずとも書画を作つて贈つたと言う。ここには禪僧が書き伝えた所とはまた異つた日観の一面を見ることが出来る。狂逸な言行を離れて、嚴冷な日観その人を禪僧がみた場合には、一山の言葉のように一代の偉人とまで稱えられる。葡萄画巻に跋した平石如砥も、日観が同輩を眼中におかぬほどの達識の人とし、杭州の明碧軒で晩年の日観に親炙した経験を通じて「徳色に熟親し、飮くまで明訓を聞いた」と、高德の師僧に接したさまを語る。散聖に較べられるだけあつて、外面上の奇逸な言動とは似ず、内には深い悟境と道徳を日観は包みもつていたに違ひないと思わせる。如砥は続けて日観の墨戲である葡萄巻をば、普通の草花の画とか、画師の筆跡などと同じに見なしてはならず、慎んで宝蔵するよう所蔵者を戒める語でもって跋文を締めくくっている。⁽¹⁶⁾ 日観は詩書画の三芸で広く知られたに違ひないが、彼をよく知る人の間では、芸

によって人が知られたのではない。彼の人品道德の故にその詩書画が一層高く評価されたのである。こうした日観の人品の異った面を簡単にまとめたのは宋濂の書いた葡萄図の題記であろう。

人知中言師以善画名世。而不知其結字清逸。有晋人之風。知其字之佳者。縱有其人。而又不知其超悟心宗。而有翛然出塵之趣。是以趙魏公。鮮于奉常。常雖服其用筆精絕。而師之忘去翰墨町畦。玩弄于人間世者。要未能察之也。今觀此卷。或書雜詩。或画葡萄三数枝。意到即成。略無碍滯。而蛟龍奮迅之勢。自不可掩。豈所謂天機全者。固自有異人人耶。宋濂 宋学士全集 補遺卷三 題温日

観葡萄図

宋濂の言う所は一山の所見に似て一段と明晰である。日観は葡萄の画家として最もよく知られ、次いで晋人の風格を得た書家として知られるが、彼が深く禅の悟に達していることを知る人は少い。趙孟頫や鮮于伯機のように彼が書画の筆法に精妙を極めたことに感服する人でも、彼が筆芸の道など忘れ去り、世の中を玩弄していることは理解していないと言う。仏教に深い知識をもつ文人宋濂でないと言い易くないことである。

日観は上に述べたように、文人士夫から敬愛されたので、他の禅僧画家とは異り、その作品が賞鑑家、収集家によって著書に記載されることも稀ではない。しかし詳しく記録されたものとなる僅か数本しかない。その中で製作年時の最もおそいのは癸巳の歳、至元三十年の三月、有見副堂に贈った一本である。この画卷は紀年を伴う日観の款識があるものの、著録者によって紀年の月日に相違があり、これを贈られた僧の名も口兄副寺、または有見副堂と同じくない。その上、画の後にある元人の詩跋の順序も著録者によって異なる。また鄧文原、虞集、銭謙ら著名人三人の詩があるものもないものがある

等、大きい不一致があつて、何れが真本であるか推測もつきかねる。しかし癸巳の年にはなお健在であつた証拠はあり、上記の一本の外、同じ干支の年の款識のある葡萄画が中世日本に伝来していたことが江月宗玩の墨蹟ノ写の記載によってわかる。但し現存する癸巳の款識ある葡萄一幅は真跡ではない。中国で著録された数本の中で、最も詳しく記録されていて上のような問題がなく、かつ日観の歿年について推測する手がかりを与える記述を含むなどの諸点で重要なのは、至元庚寅の年紀を伴う日観の自識があり、彼が曾遇なる人に贈つたことの明瞭な一本である。この画卷は六研齋筆記三筆の巻一、大観録巻十五、石渠宝笈初編の巻三十二、須静齋論画絶句などに著録されているが、石渠宝笈の記録が最も詳しい。曾遇と言う人は庚寅の歳、至元二十七年、金字大蔵経書写の役に召集されて北京に赴こうとしていた。出発の直前、西湖北山の靈隠寺の住持であつた虎巖浄伏に別を告げるために寺へ行き、日観に邂逅したのである。曾遇は華亭の人、日観の同郷人であり、偶然に彼の華亭弁を聞いて日観の方から話しかけてきたと言う。そして日観は自分の房室へ曾遇を招き入れ、寺の方丈から酒果を求めてきて飲み合った上、求められもせぬ葡萄一卷を画いて与え、また彼が写経の任のため都へ上ることを聞いて、当時都にいた趙孟頫のためにも一本を作り、これを趙氏に届けるよう曾遇に托した。日観は感興の動くままに画き、人から求められて強いて画くことはなく、意が動けば求められずとも画き与へたと言われるが、その通りのことが靈隠寺での一日に起つたのである。曾遇は写経の事が終つてから直ぐには南に帰らず都に滞留し、日観から与えられた葡萄画卷に、趙孟頫を始め都の諸名士から詩跋を得た。江南に帰つて後、大徳元年になつて、十数家の題跋の後に曾遇が自ら筆を操つて、始めて日観を知つた日のことからこの画卷に関する細かい事情を記したのは、日観を始め、題跋筆者の半ばがここ

数年の間に相繼いで逝去し、今昔の感に堪えなかったからである。日観逝去の年については曾遇は明瞭に記しておらず、彼の跋からは日観が至元二十七年から大徳元年までの間に世を去ったことしかわからない。しかし一方、問題があるものの癸巳の年、至元三十年自題の作品が著録されていることもあり、より確実には、平石如砥が日観の葡萄画卷の跋の中で、至元二十九年、三十年の間には杭州の明碧軒で屢々日観に会い、とくと教えを受けたと述べているから、至元三十年には日観はなお在世していたことに疑はない⁽¹⁷⁾。日観の歿年は恐らく至元の末年か元貞の初年の頃であろう。なおこの曾遇本葡萄画卷には月江正印も跋を書いており、曾遇と日観が知り合った当時は、自分も靈隱寺の冷泉山中に居たのに、日観に会う機会を得なかったことを深く遺憾としている⁽¹⁸⁾。曾遇本葡萄画卷が清朝において乾隆皇帝の大収集に入ってから後⁽¹⁸⁾の消息については、残念ながら同じ収集にあった他の一本とともに、何も知ることができない。現在、中国には日観の葡萄画の伝存しているものがあることは知られていない。

日観の画芸は、あらためて言うまでもなく、墨葡萄の専芸で広く知られている。時としてはまた枯木の類をも画いた。枯木の画では宋の廉布に比較されたこともある⁽¹⁹⁾。枯木松石の類は唐朝にその起源をもち、一科の芸の最も古い形であり、北宋時代には多くの画家がその伝統を承けつぎ、元代に入ってから北宋画風の復興するに伴って、一段と盛になった。かの石菖蒲の画で名を知られた子庭祖柏も枯木の作を遺している。日観が墨葡萄の外に枯木を画いても、特に異とするにはあたらなない。明末の汪珂玉はまた日観の竹菊図巻を著録している。墨竹については特に言うまでもなからう。墨菊に関しては、日観の壮年の頃、すでに高翥が墨菊を得意としていたから、日観に同類の作が

あっても怪しむには足らない⁽²⁰⁾。これらの画目をみると、日観の画芸は文人の墨戯に近いものであると大体推測がつく。しかし彼の墨戯は何と言っても墨葡萄が中心であって、それでもって名声を博したのであった。葡萄は常に一種の西方異国情調を漂わすものとみられていたことはすでに述べた通りであるが、浄土業の行者でもあった日観にとっては、葡萄は純然と美的感興を託する対象であるに止まらず、阿弥陀仏国土の香をそれとなく運んで、宗教的心情を美的感情に重ね合わせるものであったことが、彼の自画自題の言葉から察せられる。

日観の葡萄画について記述を遺した人々の中で幾人かが共通して語ることが二点ある。その一つは日観が草書の筆法で葡萄を画いたこと、その二は彼が興に乗って草率に画いたことで、この両者は互に関連している事柄である。書の筆法を画に導入することは古くから始まっていたことで、南北朝時代から遡る。梁の張僧繇がその人で、彼は衛夫人の筆陣図によって点曳斫拂の筆法を画に用いたと言われ、これが書画筆法同一論の一つの根拠にされた。

元代は書画筆法同一論が盛になった時で、殊に竹石画においてそれが顕著で、石は飛白の筆法により、竹は篆籀の筆法によって画くと言われた。日観の場合は草書の筆法で葡萄を画くと言われている。日観を載せた陶宗儀の書史会要は簡短な叙述の中で、彼が草書に巧であることを述べるに続いて、彼の葡萄画における枝葉の描写は皆草書の法に成るとしている。袁桷が老温または日温と呼ぶ書家であり葡萄の画家でもあるものが日観として誤なれば、彼は壮年には繞城帖を学び、大字には顔真卿に倣うなどしたが、老年に入ってからには顛放となった⁽²¹⁾と言う。その顛放な書風とは彼の晩年の自由な草書を指すのであろう。その他の諸家が賞美するのは皆日観の草書であり、彼の葡萄画が書の筆法で画かれたと言う場合も、多くは草書の筆法を言う。画に草書

の筆法が入ると言う時に想起されるのは、五代の逸格的な画家である張図や陸晃らの縦逸な筆法に類すると言われていることである。彼らが書に巧であったことは伝わっていないので、彼らの筆が日観と同様に草書の筆法と相通するものであったことは言えないが、彼らの粗放で草書に類する筆法を用いる逸格的画風が後世に伝わったことは、草書の筆法を導入した画法の生まれる素地を作ったとみることができ(22)。そして日観その人も逸格的な画家であったのである。そのことは後に述べる。

第二に、日観は他の超俗的な画家と同じく、自己の感興の動くままに、その時にだけ筆をとり、他人の依頼に動かされて画を作ることをしなかったと言われている。特に富み栄える人々は彼の嫌う所であった。反対に教養と品格を具へた士人に遇えば、悦んで筆を揮って画き与えたと(23)言う。そして一旦感興が湧けば、急に筆をとって一気に画きあげた。楊仲弘はその製作の有様をば、電の如く拂って踪跡なしと述べている。李日華が自家所蔵の日観の葡萄卷について、彼が手の動くままに洒落に筆を運び、ことさらに意匠を構へたとは見えないというのも、同様の消息を伝えるものであろう(24)。このことは実際、日観の作品に照してみても首肯できる所である。興が高まり極めて草率に画く時には、長谷真逸の記すように手でもって墨を潑した(25)。更に鄭元祐は日観の葡萄画の題詩において、彼が頭髮を墨に浸して画いたと述べている(26)。これらの奇矯な画法は、中唐から五代、宋初の間に発展した逸格的画風の特徴とする画法であって、日観もまたそれを承けついで逸格画家であったと考えられる。草書に熟達した彼の場合、現実の葡萄の形には拘わらず、逸格的な粗放な描写を行う際、自然に草書の筆法が画中に発現するのであろう。画の立場からすれば、草書の筆法も粗放な描写の一端に外ならないであろう。日観の葡萄画を賞美してこれを文章に書き、詩に詠む人は少くないが、彼

の葡萄画の具体的な様相を伝えるものは、同時代の人の文筆にはない。ただやや時代が下って明の余永麟は簡単ではあるが、日観の画を考えるものにとつては有益な叙述を遺している。彼は画の収集家が殆ど作品の遺存しない古代の高名画家の作を求めようとするのを愚とし、山水、花鳥などについて、なお作品の入手し易い、かつ取得して喜とするに足る画家を列挙した中に日観をも数えあげた上、あらためて日観に言及して左の如く言う。

(上略)温日観元僧也。画葡萄。多作横過老幹。稜穉。静觀以下。皆不及也。北

臆項語

「多く横過する老幹を作る」とは僅か六字ながら、日観の葡萄画についての貴重な注釈である。日観以外の墨葡萄は大抵みな大蔓が並びながら、又はもつれ合いながら垂下する勢を画くものが多いが、独り日観は画面を横に過ぎる幹あるいは大蔓を写すと言う。現存する日観の葡萄画はまさしく横過の蔓を画いており、余永麟の言は我々を誤ることはない。日観の葡萄画は他の作家とは著しく異った個性的特色を具えるものと言つてよからう。

日観の書画が日本に伝来したのは相当早いと推察される。一山一寧が来朝した時に将来した可能性もないではない。実際の作品が見られぬ時に、一山が日観について彼此と子弟に物語することはあるまいと思われるからである。やや下って画蘭で有名だった鉄舟徳済が葡萄を画いている(25)。鉄舟は元に遊学して二十年も滞在したから、かの地において日観やその弟子たちの作品を観て、それに倣ったことも考えられる。しかし彼の小師である愚溪右慧の葡萄画に明かに日観の強い影響が認められるから、愚溪が鉄舟を通して間接に日観を学んだとするより、日本に伝来していた日観の作品から直接に影響を受けたとみる方が蓋然性が高いのではなからうか。義堂周信が竹隠の求に応じ

て良三位の葡萄画の扇面に題した詩に「画工謾擬温夫子」の句がある。⁽²⁶⁾温夫子とは外ならぬ日観子温で、その扇面の筆者が日観の画風に倣ったことを言うのである。この題詩は、空華集の七言絶句の排列順によると、愚溪右慧への贈詩とともに永和元年の作であるらしく、この扇面の葡萄画は愚溪の作である可能性もないではない。それはともかく、これらの資料は少くとも一部の画家は南北朝後期に日観の葡萄画を学んでいたことを示し、当時すでに日観の画蹟が日本に将来されていたことを物語る。禅林小歌の中国画家の名寄せに日観の名が入っているから、彼の名が早くから日本で知られていたことは疑ない。下って江月宗玩の墨蹟ノ写には日観の書画数点が著録されている。ただし彼に関する知識は一山一寧の時代からあまり広まらなかったと見え、禅林小歌の注には彼をば雪窓、梁楷とともに俗人と言っており、墨蹟ノ写では、日観の自題と考えられるある葡萄の題画詩をのせて、芬陀利華の印があるにも拘はらず、「賛不知、儒者ノ筆力」云々と記している。探幽縮図、狩野常信の模本に入った日観の葡萄画は少くないが、その中に真蹟が幾本含まれていたか今では知る由もない。今日に伝わる日観画に真蹟と認められるものは殆どなく、ただ井上家旧蔵の一本あるのみである。

井上家旧蔵の墨葡萄は文字通り横過の一枝を画いている。右辺中段、少し枝のもつれた中から抜け出た一枝が急に曲って、横ざまに画面を切って左辺へと走る。この枝は前後二筆で画かれており、その筆法はまさに草書の筆法と言うにふさわしい。右辺のもつれた枝の下端から、やや渴筆気味の濃墨の筆を始は僅かに縦に打ちこみ、直角近く曲って速い速度で左へ、画面の幅の五分の四の所まで一気に掃く。ここで筆を継ぎ、同じく渴筆気味の速い筆を画幅の左端まで引く。葡萄の枝の現実的な形を写そうとする意図はこの両筆には殆ど認められない。代って烈しい生気の迸りがある。筆を継いだ所が自

然に枝分かれする結節となり、そこから枝とは反対に斜め下りに右へ蔓が一本、枝の前方へさし出る。末端に葉が三枝、中途に果実一房をつけ、その房に近く飄逸な姿の孫蔓がまきついていて、蔓の弯曲した形は直線的な横過の枝と著しい対照を作る。更に左端に近く、枝の上方に葉の蔭から垂れた果実一房が下がり、同じ所から前へと分かれ出た蔓が、屈折して一度画外に出て再び画に入り、右方へ差し出る。右辺ではもつれた枝を半ば被うように大きい葉が上下に二枚ひろがり、右端に接して果実一房が半ば姿を見せている。一見すると散り散りにおかれたかに見える葉や果実をば、横過の枝が互に連繫すると同時に、それらの間の空間を押しひろげる働きをしている。

日観の葡萄画の葉の形を、陳繼儒は破袈裟の如しと言った。この比喻は必ずしも葉の形が実際に破れ袈裟の形に似ていることを意味しない。日観が外形を気に留めず、奇逸な行動の多い僧である所から得た詞人の連想で、粗放な逸筆で画かれた葉の形容としたものである。井上家旧蔵画についてみれば、特に右辺の二葉に粗放な筆法が顕著に現れており、もし葉脈を描いた線がなければ、葡萄の葉を写したとは見えないだろうと思われるほどに現実の形を無視した表現である。破袈裟の如しとはその詩的表現として妙である。枝葉の描写に較べると、果実のそれはさまで粗放ではない。淡墨の円形の墨暈の中にやや濃い墨をたらして、工まずして果実の球体のまるみを表す。濃墨のたらしの位置がほぼ一顆ごとに異なるので自然、各顆の角度の違いが暗示されており、それを見ると、画全体の葡萄らしさが一挙に高まってくる。しかしながら、この画は決して葡萄の枝の外形の形似を得ようと努めたものではない。外形を越えて葡萄の一枝に自然の真実を捉えようとしたものでもない。この画の生命はあくまで粗放な筆法による簡略な描写を通じて、画家の胸中にある逸気を表出するにあり、それによって葡萄も自ら生気を得るのである。

それは倪瓚の墨竹と共通している。倪瓚の言葉に、自分の画く竹は聊か胸中の逸気を写すだけである。それが竹に似ているかどうか、葉が繁っているか疎らか、枝が斜か真直ぐかなどには頓著しない、塗りたくっている間に、他人がこれは麻だと言ひ蘆だと言ひても、自分はいや竹だと言ひはることはできぬ、と言つたその画竹と本質的に同じ道を行くものである。⁽²⁷⁾倪瓚の画は逸品と呼ばれている。日観のこの葡萄もまさしく逸品画であると言つてよい。これをやや写実的で筆意を見せず巧緻な作である東京国立博物館蔵の伝任仁発の葡萄垂架図と比較すると、日観画の逸品的特色は一見明瞭になるだろう。この両者の対照と平行する相違は日本でも見出される。明かに日観の影響下にある愚溪右慧の葡萄画と、伝任仁発画かそれと同類の作の影響をうけたと覚しい本法寺蔵の墨林愚庵のそれとの間には同様の対照的な相違が認められる。

余永麟が北牕瑣語で日観を論じた時に引き合いに出して彼には及ばずとした稜穉、静観の二人が日観を学んだものか否かはわからないが、彼には少くとも一人の弟子があつたと伝えられている。農田余話の日観に関する一条の中に見える沈仲華がその人である。湖州の人で日観の画法を伝えて佳致を得たと言われ、明代にはその作品が多く見られたと言うが、今日にも伝存するとは聞かない。⁽²⁸⁾遙かに時代が下つて清朝に入つてから、日観の画法を追倣したものに嘉興の呉九鵬がいる。全く日観を学んで水墨の葡萄を画いた彼は点染神ありと評され、その葉もまた日観と同様、破絮裘に似たりと言われるがその作品は見ない。⁽²⁹⁾清代になつてからも日観の画法を学ぶものが現れるには、彼の作品がなお流伝していたのであるが、今は中国には日観の作品が存することを聞かないのは残念なことである。

註

(1) 僧演については宋の大観の物初賸語の題葡萄の一文に「演上人寓意於露顆」云々とあり、僧因に関しては、敖陶孫の臞翁詩集に「高郵因師葡萄蘆雁秋瓜三種」の詩がある。歴代題画詩類卷九十二には葉洞春の葡萄画に題する七律一首、また葡萄画を求める五律一首と陳普の二詩を引用している。

(2) 長谷真逸の農田余話卷上に左の叙述がある。

古人無畫葡萄者。吳僧溫日觀。夜于月下視葡萄影。有悟。出新意。似飛白書體為之。酒酣興發。以手潑墨。然後揮筆。迅于行草。收拾散落。頃刻而就。如神甚奇特也。既死。其弟子沈仲華。湖州人。傳其法。亦佳。世多見之。

(3) 張堯同 嘉禾百詠 寂照庵詩

石門泉志によると寂照庵は石門県の一都に在る。

また周弼の詩がある。ここにはそれを挙げる。

晝々多應半熟時。落斜高挂冷攢枝。分明記得山窻下。一架寒藤帶雨垂。周弼 端平詩簡 題子溫水墨葡萄

なお江月宗玩の墨蹟ノ写、慶長十九年の冊に載せた日観の臨宏智正覺禪師書の款に寂照知婦子書と見える。

(4) 海藏紀年録、徳治元年の条、一山が虎関に日観について種々教示した語の中に見える。

(5) 戴表元 剡源集 卷十八 題温上人心経の題記に見える。題記の全文は後に引用する。

(6) 恕中無愠 山庵雜錄 卷上に見える。この条は全文後に引用する。

(7) 日観書の般若心経に関しては注(5)、宏智正覺書については注(3)参照。

大慧法語の書については南石文琇語録 卷四 題温日観書大慧語寧諡中所蔵をみよ。なほ了庵清欲語録にも日観が書いた大慧の語の例がみえる。

(8) 注(3)参照

(9) 常盤山文庫蔵 平石如砥墨蹟、日観画葡萄跋

日観老人。詞翰妙一世。脱略規矩。眼空輩行。嘗以墨戲作佛事。得之者。若獲夜光連城也。尚紀壬寅癸巳間。熟親德色。飲聞明訓於杭之明碧軒中。俯仰四十年。迨如一日。衰暮之餘。忽覽手卷。恍焉夢寐。而今而後。固宜寶之。慎勿以尋常間花小草。畫師之筆視之也。後至元六年庚辰首夏。天童如砥敬題于雙檜客位。

(10) 袁桷 清容居士集 卷六

袁桷は妙明、日温二僧の書を賞して七言古詩二首を作り小引を添えた。今ここには日温に関する一詩に小引を併せて録する。

近有善書僧日温妙明。温華亭人。明眉山人也。余嘗識于玉几山。其年未四十。温

老矣。余識于靈隱。視其書之高下。亦類夫年也。閏十月。有僧攜明書示余。遂各為一章美之。且記二子之出處焉。

老温作書誰授訣。少學潘郎繞城帖。

興來握筆弄春妍。靄々芳叢開飛蝶。

平生大字顏魯公。晚復顛放少露鋒。

論功古法雖未至。瀟灑要是僧中雄。

醉裏葡萄墨為骨。秋葉東西雲鬱勃。

裏繪急點數玄珠。不識公卿是何物。

只今書畫名已傳。華亭鶴唳悲流年。

西方金仙在何天。寄聲為了塵中緣。

右の詩と引とて袁桷は温を華亭の人と言ひ、靈隱寺で識り合つたと言ふ外、老いて書法が顛放となつたとし、また醉裏に画く葡萄は墨をもつて骨とすると述べているから、この日温は日観を指すとして誤はなからう。

(11) 石渠寶笈 初編 卷三十二 宋僧温日観葡萄一卷(上等)

月江正印はこの巻に七言古詩一首を題し、その後添へた後引でこの感想を述べている。

(12) 李日華 六研齋筆記 三筆 卷一 日観画葡萄卷

(13) 注(11)所引の石渠寶笈 温日観葡萄卷の曾遇跋。

(14) 鄭元祐の僑吳集卷二、温日観画葡萄詩に見える。

伊昔錢唐温日観。醉兀竹輿殊傲岸。却將書法畫葡萄。張顛草聖何零亂。枝枝葉葉點畫間。醉瞠白眼看青天。狂呼大盜楊綰統。天不汝誅吾厚顏。楊加筆死曾不畏。故老言之淚尚潛。畫成葡萄誰賞識。惟有鮮于恒嘖嘖。醉叩齋室支離疏。拊摩悲歌淚填臆。鮮于設浴師浣之。為師滌垢曾弗辭。人言結構張廷尉。蔓如龍鬚實馬乳。問師揮毫奚獨取。只因漢使遠持來。野老詩成淚如雨。

(15) 一例としては、王冕の竹斎詩集卷二の次の詩をあげる。

題温日観葡萄

日観大士道眼空。伴狂自喚温相公。浩然之氣塞天地。書法悟入葡萄宮。有時潑墨動江浦。叱喝怒罵生風雨。草聖絕倒張伯英。春蚓秋蛇何足數。龍鬚倒卷兒眼活。枯藤脫落無根株。多年明月喚不下。爛葉搭架秋模糊。流沙渡頭聽駝鼓。滄海桑田事非古。大士于此不露機。示人落落離言語。只今相去數十年。看書看画心茫然。安得美酒三百船。與君大醉西湖天。王冕 竹斎詩集 卷二 題温日観葡萄

(16) 注(9)参照

(17) 注(9)参照

(18) 注(11)参照

(19) 斷江覺恩の詩に見える。

爛醉三味酒。閒眼五竺雲。何年倒滄海。拾得老龍筋。藉甚知婦子。寧師射澤翁。千年無聲樹。五彩盡虛空。斷江摘稿 題温日観枯木二首

(20) 高義は南宋の人。字は九萬。菊圃と号する。墨菊を得意とした。

(21) 注(10)参照

(22) 張図、陸滉らの逸格的画家については拙稿「逸品画風について」(美術研究第百六十一号)を参照

(23) 楊仲弘詩集 卷一 題温日観墨葡萄

日観作葡萄。電掃無踪迹。誰於故紙上。點綴辨墨筆。西天十萬里。來往僅瞬息。吹關固不小。遺下履一隻。

(24) 李日華 六研齋隨筆 三筆卷一

元僧温日観隱南屏。兼通外學。為人高潔自恣。以墨戲見意。不輕為人作。余纔得其葡萄一紙。僅作尺許一杪。破葉瑣藤間。垂十五顆。若隨手灑落。略不經意者。真神品也。乃為鄉人曾遇心傳省元所作者。本作二紙。以一託心傳。寄趙子昂於燕京。此遇自得而手裝者。并得子昂題語。而跋者聯翩。皆勝國高逸也。日観草法。直追張府君芝。旭素非所屑意矣。

(25) 義堂周信 空華集 卷一に鉄舟葡萄と題する五言絶句二首がある。その一に言ふ。

懷哉老鐵舟。秃筆寫涼州。只怕西風急。吹殘滿架秋。

(26) 義堂周信 空華集 卷三に見える。

題良三位葡萄扇面。為嚴竹隱求。

海國葡萄人不愛。荒山歲歲長龍鬚。畫工謾擬温夫子。烟雨兼將上扇圖。

(27) 倪瓚 清悶閣全集 卷九 跋畫竹

長谷真逸 農田余話 卷上 葡萄画の条に見える。

(28) (上略)其弟子沈仲華。湖州人。傳其法。亦佳。世多見之。

(29) 吳九鵬は光緒嘉興府志 卷六十人物傳 石門藝術 胡炳の条に附見する。

(上略)又吳九鵬。字東宿。庠生。善畫水墨葡萄。其葉似破袈裟。點染有神。全倣日観。